

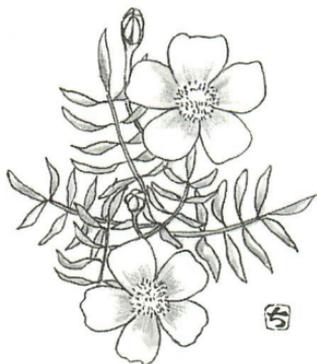
みめじみの

第34部



みめじみの

第34部



大谷光道著

目次

阿弥陀様と本願(五)	2
時間と空間	3
土台	6
場と私	8
無量光明土	13
本願寺の近況	15
御堂の着工	16
『いづれの行もおよびがたき』	18
跡継ぎ	19
ご挨拶	22
今後の予定	26
読者の頁	29
あとがき	31

阿弥陀様と本願（五）

今回は、第十二、第十三の願に進みましょう。

今までの第十一願までは、阿弥陀様（法蔵菩薩）は「往生した者には……のようにしてあげる。それができなければ、私は成仏したとは言わない」と仰って、言ってみれば、極楽に来た人の「待遇」についての願でした。

これに対して、この二つの願は、阿弥陀様が仏様としてのご自身の「あり方」を確定なさるための願です。

その内容は、十方に無数に存在する仏様の世界にくまなく阿弥陀様の光明が行き渡るようにしたい、そして阿弥陀様が成仏された十劫の昔から未来永

劫にわたりそのお命が尽きることがないようにしたい、というものです。

第十二願

設我得仏、光明有能限量、下至不照百千億那由他諸仏国者、不取正覚
私が成仏するとき、光明に限りがあつて、一つの仏国乃至百千億那由他の
諸仏の国を照らさないようであれば、私は覚つたとは言いません。

(光明無量の願)

第十三願

設我得仏、壽命有能限量、下至百千億那由他劫者、不取正覚
私が成仏するとき、壽命に限りがあつて、一劫乃至百千億那由他劫で終わ
るならば、私は覚つたとは言いません。(壽命無量の願)

那由他(または、那由多) 〓極めて大きな数の単位で、一〇の六〇乗(ゼロが六〇個)。一説
に一〇の七二乗(塵劫記)。下至〇〇〓一乃至〇〇〇。一から〇〇〇まで。

時間と空間

以前、「南無阿弥陀仏」の意味についてお話したときに(『第一部』参

照)、南無は帰命、つまり「心から仏の教えに従うこと」なので、「南無阿弥陀仏」とは「阿弥陀という仏様の仰せに従います」という意味になると、説明しました。そこで、「阿弥陀」というお名前は、アミターバ (Amitāyus、量ることのできない光、無量光) とアミターユス (Amitāyus、量ることのできない寿命、無量寿) の合体したものであるとも言ったのを思い出していただけるでしょうか。そのお名前の元はそもそも、この第十二、第十三の願にあつて、この二つの願が成就 (完成) して阿弥陀仏になられたのです。

そして、阿弥陀様が限らない光明と限らない寿命をお持ちになるといふことは、極楽世界が限らない光明の空間であり、限らない時間続くということなのです。

私たちは自分自身がこの世に存在しているのを当たり前だと思つていますが、よくよく考えてみると、根本的には「時間があり空間があつてこそ」と、わかつてきます。そして空間だけで時間がない場合でも時間だけで空間がな



無量光、無量寿

い場合でも、いずれも私たちは存在できません。もちろん、空気があり、大地があり、適当な温度があり、水があり、……しなければ生きていくことはできませんが、しかし根本はなんと言つても「時間と空間」で、その中に組み込まれている、あるいは、その中で育まれている存在です。このように、時間と空間が成立しているからこそ——その時間と空間がいつできたのか？ いや元々あったのだ。では元々とは？ などの議論は、今はやめておきましょう——我々の日常があるのだと気づかされ、時間と空間の意味、大切さに思い至るのです。

土台

私はよく泳ぎの話をたとえに引っぱり出しますが、水に溺れそうになつて
いる人を救うには、自分自身が泳げることはもちろん、溺れかけて助かろう
と必死にしがみついてくる人の分まで、泳ぎに達者でなければなりません。

阿弥陀様は、自分の力では成仏できない、何億、何兆、……という数限りない私たちのような凡夫——泳げない者——を救ってくださって、極楽という阿弥陀様の国に迎えて、さらに住まわせてくださるのですから、阿弥陀様のお仕事は溺れかけている人の救助どころの騒ぎではありません。したがって、ご自身にはそれだけのパワーが必要で、そのパワーを支えるだけのしつかりした足場に立っていただくさなければなりません。そのパワーであり土台となるのが、無量光と無量寿なのです。

生死の苦海ほとりなし

ひさしくしづめるわれらをば

弥陀弘誓のふねのみぞ

のせてかならずわたしける

迷いの苦海はどこまで行っても岸にたどり着くことはない。

この苦海で浮きつ沈みつしている私たちを

弥陀の本願の船だけは

私たちを乗せて必ず覚りの岸まで渡してくださるのだなあ。

(『高僧和讃』)

場と私

さて、第十二、第十三の願の本文から明らかのように、永遠のお命のある阿弥陀様の光明が、私たちの生活しているこの世、つまりお釈迦様の教化された世界にも及んでいることが明らかです。

その光明とはいったいどのようなもので、どのようにして私たちのところに届くのでしょうか。

存在するものが目に見えらるゝとは限らないことは、私たちはあらゆる場面で経験しています。そこでまず、日常経験するいくつかのことを思いつく

ままに並べてみましょう。

その場になじんで適切な言動ができないと、「空気を読めない」などと笑われます。また、元々自分が顔を出すべきでなかったとき「場違いだった」などとも言います。

高いところから下を見ると、背中に嫌なものが走ります。「落ちるのが怖い」と体が叫んで（ふるえて）いるのがわかりますね。少々物理的に言うところ「重力による位置のエネルギー」がそうさせるのです。重力などふだん考えたこともないのに、体は知っているのです。あらゆる物に重力が働いているからで、この世界は重力の場とも言われます。

深い山の中に入って方向がわからなくなったときでも、磁石を持っていれば助かる可能性は大きくなります。地球上どこへ行っても、磁石は働きます。磁石や磁性体が反応する場を磁場（磁界）と言い、地球全体が磁場だからで

す。また、磁場の中で針金を動かすとその針金に電流が流れ（発電機の原因）、逆に針金に電流を流すとその針金は動き（モーターの原理）ます。フレミング右手の法則、フレミング左手の法則というのを理科で習いましたね。

場違いの自分が恥ずかしい思いをしてはじめて……

高い所から下を見てはじめて……

磁石が北を指すのを見てはじめて……

磁場の中で針金を動かしてはじめて……

というのが場というもので、何もないとふだんはその存在に気づかないものです。

私たちの生活しているこの世界は、阿弥陀様の光明の届いている「本願力の場」です。その本願力の場と、そこにいる私たちとの関係はどうなのでしょうか。ご和讃に

煩惱にまなこさへられて

攝取せつしゆの光明みざれども

大悲ものうきことなくて

つねにわが身をてらすなり

煩惱に眼を遮さへられて、

攝取してくださる阿弥陀様の光明を見ることはないが、

阿弥陀様の大慈悲は少しも飽きて疲れることはなく、

つねに我が身を照らしくださる。

攝取せつしゆ＝慈悲の力によって衆生しゆじやうを受け入れて救うこと。

とあり、また、お馴染なじみの『正信偈』にも同様に、

極重ごくじゆう悪人あくにん唯称ゆいしやう仏
「極重の悪人はただ仏を称すべし。

我亦がやくざい在彼ひ攝取せつしゆ中

我かまた彼の攝取せつしゆの中にあれども、

煩惱障眼雖不見

煩惱、眼を障へて見たてまつらずといへども、

大悲無倦常照我

大悲、倦きことなくして、つねに我を照らしたま

ふ」といへり。

とあり、いずれも親鸞聖人が源信僧都（七高僧第六祖）の著された『往生要集』のお示しとして讃えられたものです。

「阿弥陀様の光明は見えないのだけれども、いつもこの身を照らしてくださいと感ぜられるところに「確かにその光明がある」ということがわかるのです。そしてその嬉しさにお念仏を称える、ということになるのです。

ひまわりが太陽の方向を向くように、磁石が北を指すように、私たちは西に向かつて手を合わせます。もちろん北を向いても、東を向いても、いつもここは本願力の場なのです。

無量光明土

親鸞聖人の主著である『教行信証(顕浄土真実教行証文類)』は、

教の巻 顕浄土真実教文類

行の巻 顕浄土真実行文類

信の巻 顕浄土真実信文類

証の巻 顕浄土真実証文類

真仏土しんぶつどの巻 顕浄土真仏土文類

化身土けしんどの巻 顕浄土方便化身土文類

の六巻から成りますが、その第五巻の『真仏土の巻』は、第十二・光明無量の願と第十三・寿命無量の願のみのために設けられた一巻です。光明無量・寿命無量がお浄土の基盤であることを明らかにされるための一巻で、真の仏(真仏)のおいでのなる真の国(真土)であると説いてくださっています。

その中で聖人は、お浄土の中心である報土は「無量光明土（限りない光であふれている国）」であると仰いました。「報土」とは、「報われた世界」ということです。つまり、阿弥陀様の本願に報われて現れた世界です。阿弥陀様が限りない光であふれている国を作って、そこへ凡夫である私たちを迎えてやりたいと誓われて、それが成就（実現）した世界です。

その光明が私たちの住むこの世界にも届いているのです。

〔以下次号〕



本願寺の近況

思い起こせば、先代・闡如上人が本願寺の独立を宣言されてから今年十一月でまる三十年が経つことになりました。そしてまた、早いもので来春は上人の十七回忌に当たります。御遷化は平成五年四月十三日で、その日はまた、私が本願寺第二十五世の伝燈を継ぐことになった日にもなりました。

その後、今日まで先代上人のご遺志に応えるべく、多くの有縁の方々のお力を得て、

新本願寺の土地の購入

(平成十六年三月)

下京の旧東本願寺(真宗本廟)の明け渡し

(平成十七年三月)

寺務所と仮御堂の落成

(平成十七年十一月)

宗教法人の設立

(平成十九年二月)

までを終えることができ、そしてようやく、伝統の法要を満足に行うことのできる可能な本堂の設計が仕上がり来年春着工できるところまで来ました。また先般、寺院・御門徒に留まらず、広く世間一般の方々に浄土真宗に近づいていただくことを主眼とした『いづれの行もおよびがたき』を探究社より発刊しました。もう一つお知らせしたいことは、皆様方に長らくご心配を掛けていた私の後継者を三女の純子まことに決定したことです。

御堂の着工

かねてより本堂の設計については希望通りの広さを得るのが難しく苦心していたところですが、地下にすることで問題を解決することにしました。この地は全国でも一、二を争うほど、建築規制が厳しく、たとえば、建蔽率二

○パーセント、容積率五〇パーセント、緑地率四〇パーセント、高さ制限八メートルというものです。しかし、嵯峨と言えば京都でも特に景観が重視されている地域なので、やむを得ないことでしょう。考えようによつては、それだけ環境が保全されているということ、ありがたいことだと思えてきます。これによつて、通常の一階の御堂よりはるかに広い面積を確保できることになります。その反面、出入りの不便さや湿気の問題があり、それを解決してもらうために、設計士に苦勞を掛けてきたものですが、皆様方と共に満足できるものになったと思つています。

来春着工すれば、平成二十三年の宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌にもまだまだ余裕があるので、来年秋に第一期の躯体工事を終えたあとコンクリートを十分乾燥させてから、第二期の内装工事をするようになりました。

また、一階は御門徒の休息その他、多目的に使える設計になっています。

《今後の予定、外観図・設計図は巻末参照》

『いづれの行もおよびがたき』

九月下旬、探究社より『いづれの行もおよびがたき』を発刊いたしました。私は、御門徒以外で浄土真宗にご縁の薄い方々にも親しんでもらえる「入門書の入門書」、つまり浄土真宗に入門する気になってもらう本を出したいと考え、今までの『みめぐみの』のうちから、より一般向けの題材を選んで、さらにわかりやすく書き改め、また内容を追加する作業を続けました。それで、この度ようやくこの単行本を発刊することができたものです。そして、一般の方々のためになると私の自己紹介も必要となり、また同時に、何故新たに本願寺を作らねばならないのかも知っていただきたいので、そのための一章も設けました。

寺院としての外形は、やがて本堂が完成することでほぼできあがることとなります。しかし、形があるだけの箱物で終わってしまつては、とんでもな

いことです。それで私としてはどうしてもその前に、本願寺が何のための寺であるのかを、広く世間一般に明らかにしておきたかったというのも、この本を出版した大きな理由です。もちろん「浄土真宗の教えを広める寺」に違いないのですが、宗祖親鸞聖人から代々伝わった正しい浄土真宗を広めるための寺であり、正しいものをそのまま正しく伝えていくことがいかに大切なことなのか、そこに詳しく記しておきました。

跡継ぎ

私の後継者を三女の純子とすることについてはかねて内定していたものですが、得度式の日取りも決まり、この度正式に発表する運びとなったので、ここに誌面を借りてご報告いたします。

二年前に大学院を卒業後、会社勤めをしていますが、今年初め「思うところあって」私の跡を継ぐ決心をしてくれたものです。現在本人は、声明や教

学はもとより、当主として身につけるべきことの研鑽に励んでいるところで、やがて私が隠居すると、女性初の法主が誕生することになります。

得度式の日程は、準備期間等とにらみ合わせた結果、来年三月二十八日と決定し、本願寺において古式（カキマシ）に則り行います。

読者の皆様方には、私の後継者について今日までおそらくたいそうご心配をかけてきたものと思っております。そしてまた、新天地の本願寺の基盤が確立していくにしたがって、このご心配はいっそう大きくなってきていたものとも察しております。私自身としても後継の決定は長らく気がかりであったので、ここでひと安心というところです。

本願寺の歴代に女性はなかったのですが、本願寺の基礎を築いてくださったのは覚信（かくしん）尼という女性でした。親鸞聖人亡き後、聖人の末娘である覚信尼公は、皆が聖人を追慕するための御廟にと、ご自身の土地を提供して、自らお墓守り（留守職）を勤められました。これによって御廟は、聖人の御門徒

——今で言う御門徒の意味でなく、聖人のお弟子のこと——の心のよりどころとなり、やがてこの御廟が本願寺となりました。今日までに女性法主の誕生する機会はいくらもあつたと思われのですが、たまたまその時代の社会的通念やその他の環境が整わなかつたに過ぎないのだと思います。

今後は、私共々幾久しく呉々もよろしく、お願い申し上げます。

以下に、本人がご挨拶を兼ねて、ここに至つた経緯を申し述べます。

ご挨拶

大谷純子

読者の皆様、日頃より何かとお世話になり、誠にありがとうございます。

父の勧めもあり、この度、大谷家の跡を継ぐことを決心いたしました。ここに至った経緯を皆様にお伝えするため、そして今後私自身が困難にぶつかったとき初心を振り返るためにも、ここに残したいと思います。

私は、ごく普通の女の子として育てられました。「大谷家の……」とか「天皇家の親戚の……」とか、良きにつけ悪しきにつけ、周囲からそう言わ



れることも多かったです。私の両親はそんなことは気にせず一人の人間として育ててくれました。「大谷家の跡継ぎとして」意識したことは今までほとんどなかったわけですから、跡を継ぐということはそれほど容易に決心できたわけではありません。

今年三月初旬、一人旅をして富山県井波の瑞泉寺に行きました（瑞泉寺は平成十五年まで父が住職を務めました。その後は大谷派の手にわたっています）。誰もいない静かな御堂で手を合わせているうちに幼い頃の記憶がなつかしく思い出されました。訪れたときにはいつも「おかえりなさい」と出迎えてくれた地元や「瑞泉寺を守る会」の人達のことを思うと今でも温かい気持ちになります。

瑞泉寺での思い出は楽しいことばかりではありません。紛争が激しくなってきたときは父が一ヶ月以上も京都の家を留守にして瑞泉寺に滞在したこともあ

りました。いろいろと思い出しているうちに、嵯峨に移るまでの出来事を振り返っていました。祖父が亡くなりその葬儀をめぐって対立したこと、聖護院の家を追い出されたこと、度重なる裁判で疲れきった父の顔……両親ともあまり暗い顔を見せることはありませんでしたが、苦勞の多かったことと思います。

私はこの旅の中で二つのことを思いました。

まず一つは、私の人生は自分一人だけのものではなく、たくさんの人に助けられて支えられて今ここに生きているということ。それまで跡を継ぐということ、自分の将来を犠牲にするような気になっていました。本来ならばたくさん選択肢があるはずなのに。でも、人生は自分一人だけのものではない、周囲の人あってこそその自分。だから、もしかしてその方々へ恩返しができるのならば……。そう思いました。

そして、もう一つは祖父や父が大きな犠牲を恐れずに守ってきたものを受け継がなければならないということ。何を取り上げられても胸をはって堂々と歩いてきた父や、安定した道ではないと分かっているながらも信じて付いてきてくださった方々のことを思うと、やはり自分がやらなくては、という気持ちになりました。

今は、お役目を果たせるかとても不安ですが、責任ある立場の人間として誇りを持って取り組んでいきたいと思っています。

これまでの皆様のご厚情に深く感謝するとともに、今後も皆様のお力を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

今後の予定

平成二十一年 三月二十八日

後継者得度式

四月十二～十三日

闡如上人十七回忌法要

四月下旬～十月

本堂建築（第一期）

平成二十二年 五月～十月

本堂建築（第二期）

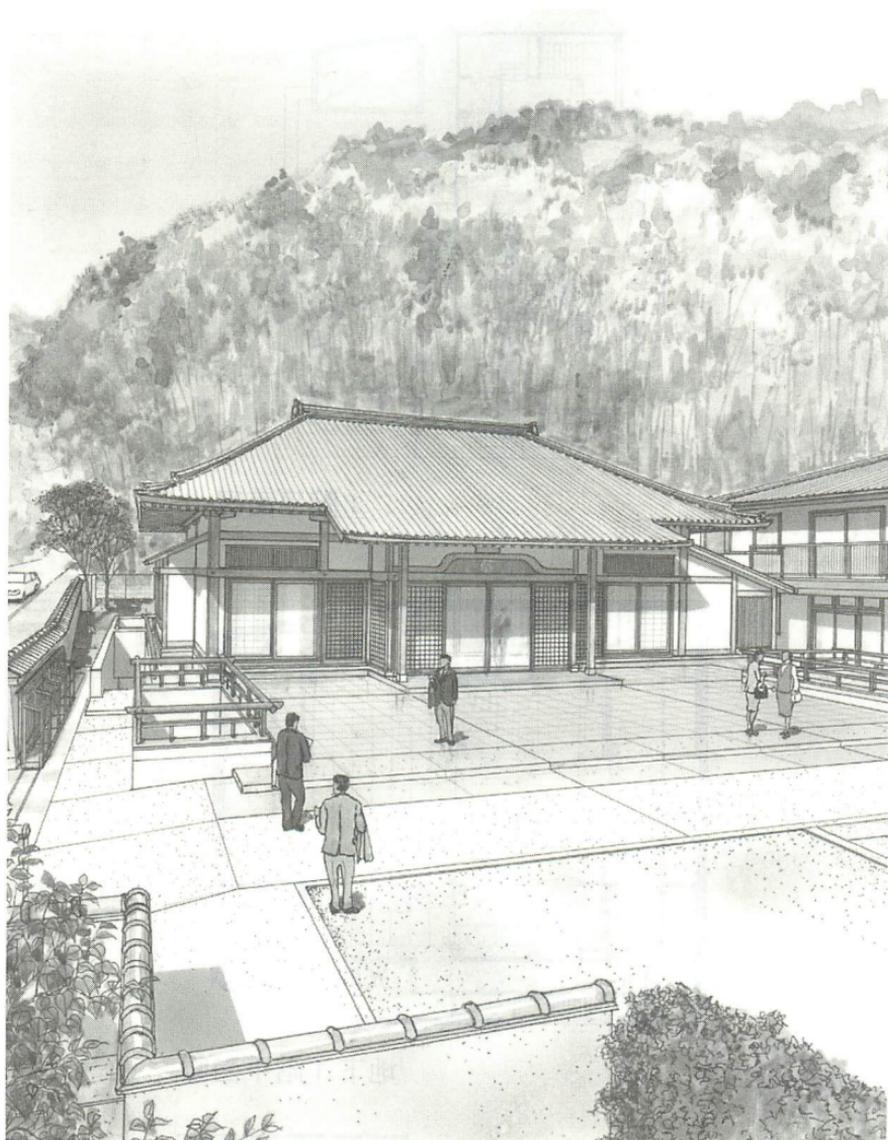
十一月下旬

本堂落慶法要

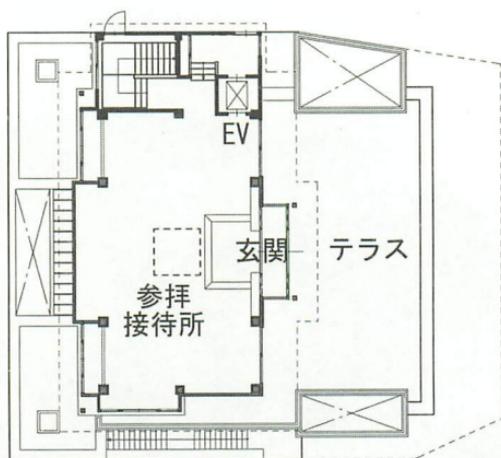
平成二十三年 五月下旬

宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌

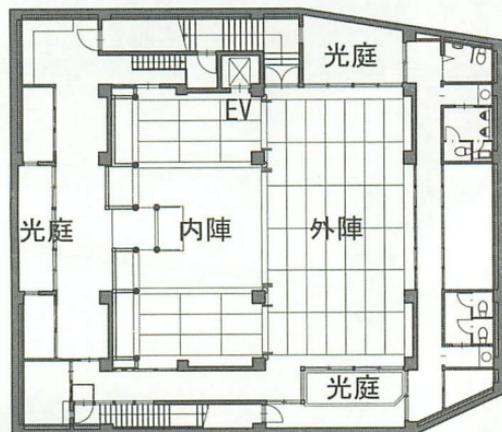
本願寺の近況



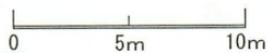
本堂完成予想図



1階平面図



地下1階平面図



読者の頁

感想
意見

(三十三部の感想)

成仏の予約切符

どこでいただくか

ただただ「信」あるのみと

頭がさがりました。

滋賀県守山市

高橋 一成さん



より分かり易く、 より身近に浄土真宗を説き明かす

十余年書き綴ってきた教化冊子『みめぐみの』の
題材を元に読みやすく書き改めた珠玉の一冊

東本願寺大谷家 大谷 光道 著
第 25 世 当 主

「いづれの行もおよびがたき」

親鸞聖人の直のお言葉として伝わる「いづれの行もおよびがたき身」……
「仏様からもっとも遠いところに居るはずの私が、一番近くに置いても
らっている実感から、口に称える念仏。これが浄土真宗だと思います」
(本文、「あとがき」より)

【目次】

第一章 親鸞聖人の出された結論

親鸞聖人の結論づけられた、僧侶も在家の（ふつうの）生活をする浄土真宗の考え方を再考する

第二章 日常生活の中に糸口を見つける

「元気」「うちの子よその子」「科学と宗教」など、日常生活の中で見つけやすい信仰へのヒントを与える講演、法話を七話

第三章 筆者と浄土真宗

「第三の本願寺」は何ゆえ作らなければならないのか
そして自己の立場から見た浄土真宗の教えを語る

四六判 / 196 頁 / ソフトカバー / 定価 1,575 円（税込） / 探究社刊

直接販売割引お申し込み

割引価格 1,400 円・送料はお問い合わせ下さい。
京都市右京区嵯峨鳥居本北代町 21
本願寺寺務所内
TEL075(882)6262 FAX075(882)6220

みめぐみの刊行委員会

全国書店でもお求め・ご注文いただけます。

あとがき

みめぐみの刊行委員会

『いづれの行もおよびがたき』を十月下旬に発刊された光道台下は、休む間もなく三十四部をご執筆下さいました。まことに意義深い事ながら沢山盛り込まれ、常にも増して読み応えのある内容となっています。

五回目となる「本願」は第十二願、第十三願に進み、阿弥陀様のさらなる力強さ、大きさに気付かせて頂くところであり、「ありがたい」と胸に染み込んでくる思いがします。

また、「本願寺の近況」では、新天地・嵯峨野での本堂着工の詳細と併せて光道台下の後継者をあかして下さいました。

先代・闡如上人が独立宣言されて三十年、光道台下が伝燈を継がれて十五年、本文にもお示しのように「ようやくここまで来ることが出来ました」とおっしゃる台下の思いを、或いは純子様のご挨拶からそのご覚悟のほどを、読み取らせて頂きたいものです。

『いづれの行もおよびがたき』の中にも「第三の本願寺」への思いが綴られています。『みめぐみの』同様にご感想をお寄せ下さい。

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。
『みめぐみの』1冊の価格は200円(税込)です。

○1冊～4冊＝送料及び振替手数料(70円)はご負担下さい

※送料 1冊＝120円、2冊＝160円、3冊＝180円、4冊＝210円

○5冊～9冊＝送料は実費、振替手数料は不要です

※送料 5～6冊＝210円、7～9冊＝290円

○10冊以上＝送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です(ご住所には郵便番号をお忘れなく)。

みめぐみの 第34部

2008年11月5日 印刷

定価 200円

2008年11月10日 発行

著者 大谷光道

発行 みめぐみの刊行委員会

〒616-8432

京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21
本願寺寺務所内

TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220

振替口座 01060-5-56990

印刷 (株)中外日報社

